

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から④

五月飾りといえば、こい 屋内に飾る小型の幟旗は今のぼりや武者人形、兜(か)ではあまり見かけることがぶと)飾りなどを思い浮か なくなつた。

端午の節句は奈良時代以 前中国から伝来したとい のぼりや武者絵の幟旗(の われ、菖蒲(しょうぶ)や ぼりばた)は見かけるが、 蓬(よもぎ)により邪気な

内幟(座敷幟)

こだわり満載 五月飾り



明治初期、伯方島に生まれた男の子に贈られた内幟。 槍や馬印の両脇に幟旗が並ぶ。1869年製作、県 歴史文化博物館蔵

どを払う行事だったが、鎌 倉時代以降、武家の行事と して発展し男の子の節句と して定着していった。現在 のように飾り物をして祝つ ようになったのは、江戸時 代中期以降で、屋外にはこ いのぼりや幟旗、屋内には 内幟や武者人形などさまざま なる五月飾りが作られるよ うになっていった。

紹介する内幟は1869 (明治2)年、伯方島(現 今治市伯方町)で塩業を営 んでいた家に生まれた男児 の初節句に贈られたもので

どもの将来への祈りがかな うようにという愛情が垣間 見える。

旗の上部には青色の太い 線と細い線を並行に配した お祝いに用いられる模様 「子持筋(こもちすじ)」、 その下に2種類の家紋が染 められている。同じ家紋が 二つあることから誕生を祝 い親戚から贈られたものと 推測できる。

ある。木製の枠に幟旗2本、 十文字槍(やり)、瓢箪(ひょうたん)のモチーフを付 けた馬印、毛槍の計5本を 立てる。高さは2・14m、 人の背丈をゆうに超える大 きさである。

幟旗に注目して見ていく と、旗の素材は絹の縮緬(ちりめん)。旗を竿に通すた めに縫い付けられた乳や、 旗の下隅に縫い付けられた 直角三角形の飾り布には高 価な錦が用いられている。

乳の縫い込みは、一般的な ×印の他に、「叶」という 文字を糸で表している。子

竿の上部に黒毛の飾り物 を取り付け、旗の上端には 子持筋の下に菖蒲を描いた 「流れ旗」、旗の下隅には、 「振り止め」と呼ばれる布 製の錘(おもり)をつり下 げるが、笠をかぶった毛植 (けつえ)人形の猿が錘と してぶら下がっているのが なんととも愛嬌(あいぎょ う)。

高価な素材を取り合わせ たこだわりの内幟は、外幟 と違って風雨にさらされる こともないため、両親の愛 情とともに昔のままの姿を 今に伝えてくれる。

(専門学芸員・宇都宮美紀)

内幟は県歴史文化博物館 (西予市)の常設展示室に 6月末まで展示中。